郷土のニュース

◆葛原岩戸神楽を披露
波野村「神楽フェスティバル」

熊本県芸術参加行事「第10回神楽フェスティバル」が十月六・七日、熊本県波野村「道の駅」の「神楽苑」で開催され、熊本・大分・島根県内から十三団体が参加。

蒲江町からは「葛原岩戸神楽保存会」の十九人が出演し、伝統の舞を披露しました。

七日に出演した同保存会は、五穀豊穣を願う「五穀蒔」と、天照大神を岩戸から出す神話の神楽「岩戸間」の二番を舞い、観客を魅了。

関係者からも「現在ではショー的な演舞を行う団体が多くなりましたが、伝統へのこだわりが強く残った神楽」と、好評価を得たようです(『広報かまえ』平成十三年十月十九日号)。

◆郷土の先哲をしのぶ
中島子玉講演会が開かれる

十月八日、市制六十周年・中島子玉生誕二百年を記念した講演会が「和楽」で開かれました。

中島子玉は、佐伯藩士の息子として生まれ、藩主の命により日田の咸宜園で学び、当代きっての秀才といわれていました。また、詩にも造けいが深く、彦岳の様子をうたった「詠彦岳」など多くの漢詩を残しています。

講演会では、佐伯市出身で万葉集などの研究で知られる佐々木均太郎さん(別府大学客員教授)を講師にお招きし、女性の美を表現した「美人十二詠」を中心に、子玉の人生や彼の生きた時代についてお話していただきました。

佐々木さんは、「佐伯市には、子玉のように文化を愛する先人がたくさんいた。これからもまちづくりに励み

佐々木先生のお話は大好評

ましょう。」と語っていました（『市報さいき』平成十三年十一月一日号）。

◆一八〇人が上浦町へ里帰り

四日の「ふるさと祭り」に招かれ

新たな交流の期待

大分市八幡校区の住民が四日、上浦町で催される「町制施行五十周年記念・第十回上浦町ふるさと祭り」に招かれることになった。同校区内には、開拓の歴史の中で上浦町から入植した人が多く、当時者やその子孫にとって、同町はもう一つの〝ふるさと〟。参加する約百八十人は、「新たなつながりが生まれれば」と楽しみにしている。

幕末、府内藩財政立て直しの方策として、校区内机張原、金谷迫地区の開拓が進んだ。その際、上浦町を含め県南地域から多くの人たちが仕事を求め、地区に入植。以後、つてをたどって移住する人が相次いだ。

一九八五、九三の両年には、八幡校区公民館が「ふるさと訪問」を実施。校区を挙げての訪問は八年ぶり、三回目となる。

住民の一人、松下又重さん（七七）＝大久保＝は五八年、一家で同町から移り住んだ。「網元の長男だった。当時、夏は魚、冬は出稼ぎの土木工事。子孫のためにも安定した生活がほしかった」と振り返る。今も新聞では一番に上浦町の記事を探すという。「子ども同士を預かり合うとか〝姉妹地区〟のような関係が育ってほしい」。

藤田キクコさん（七九）は四一年、金谷迫に嫁いできた。「水も電気もない中、開墾を進めてきた。若い時は忙しく経済的余裕もなかったので、頻繁に町に帰ることはできなかった。最近は年に数回は帰るが、やはり訪問は楽しみ」と話す。

行事当日は、会場で自由に催しを楽しむことになって

現在の八幡校区の様子
（右下の建物は八幡小学校）

いる。同公民館の真田喜八郎館長は「親せきが町にいる人は、特に楽しみにしているようだ。両地区の歴史と心のつながりを若い世代にも伝えたい」と話している（『大分合同新聞』平成十三年十一月一日版）。

◆旧海軍航空隊員の山口さん案内
戦争遺跡めぐり―佐伯市―

佐伯市が十、十一日の両日、ふるさとまつりのプログラムの一つとして実施する市内の戦争遺跡巡りで、旧日本軍の海軍航空隊員だった山口勇二さん（八二）が、案内役を務める。

米テロ事件の軍事報復攻撃で、日本の自衛隊も後方支援に艦艇が九日派遣され、平和維持の在り方が議論されている折、山口さんは「平和の尊さを改めて見つめ直すきっかけにしてほしい」と参加を呼びかけている。参加は無料。

山口さんは一九三七年（昭和一二）に旧海軍航空隊に入隊し、飛行兵として東南アジアなどの戦場を体験した。真珠湾攻撃では、四一年十二月に航空母艦で佐伯湾を出発し、戦闘機で戦ったが、無事に生還。現在、佐伯市内でかまぼこ店を経営している。

今回、佐伯市から案内のボランティアを依頼され、二つ返事で引き受けた。終戦時、予科練生だった同市下久部、桧垣七郎さん（七二）も山口さんとともに案内役を務める。

遺跡めぐりの無料バスは午前十一時、午後一時、午後三時に、佐伯文化会館前から運行される。旧佐伯海軍航空隊兵舎跡に建てられている平和祈念館「やわらぎ」、戦闘機の格納庫だった「掩体壕（えんたいごう）」を見て回る。所要時間は一時間半（『大分合同新聞』平成十三年十一月十日版）。

松浦道

浦代浦から地松浦に通ずる道を松浦道という。全長約三キロ。険しい上に路面も悪かったので、昭和五年ごろ地区民総出の奉仕作業により、現在の「カンゴサコ」から登る道が作られた。

浦代浦から登る中間の場所に一本松があり、「小峠」といって休憩所にしていた。小峠から横道といって緩やかな上りになり、やがて大峠に着く。ここからは眼下に八島を望み、佐伯湾には悠然と大入島が座っている。松浦側の道は急な下り坂で、下ると地松浦に着く（『米水津村誌』）。